川越市立博物館

博物館だより

第73号

明治20年作成の「三芳野天神社麓絵図」に描かれた「初雁の杉」(図の左上)〈氷川神社所蔵〉

伝えられた歴史文化 ―「初雁」の由来から紐解く―

1．ふたつの「初雁」

みなさんは、あの川越城が、別名「初雁城」と呼ばれていたことはご存知かと思います。では、なぜ初雁城と呼ばれるようになったのかご存知でしょうか。

その名の由来は、「お城の天神さま」として親しまれる三芳野神社の裏にあった1本の老杉にまつわる言い伝えにあるといわれます。その言い伝えは川越城の七不思議の一つとして『川越の伝説』にも採り上げられています。

むかし天神さまの裏に大きな1本の杉の木がありました。毎年、北の空から飛んでくる初雁がその杉の上まで来ると、きまって「ガァー」と三声なきながら、グルッと廻ってから南の方に飛び去っていったそうです。そこでこの杉を「初雁の杉」と呼ぶようになり、お城の別名にもなったとのことです。

ところがこれとよく似た言い伝えが、江戸後期に編まれた『新編武蔵風土記稿』(以後『風土記稿』と表記)に出てきます。その話とは、毎年やってくる初雁が池の上に来ると三度鳴きながら飛び廻って去っていったという言い伝えです。その池とは的場村にあった「初雁池」(現在の霞ヶ関東小学校あたり)のことです(図１)。

つまり、川越城内の三芳野神社の杉と的場村にあった池には瓜二つの伝説があって、それが「初雁」の名の由来になっているのです(1)。

ではなぜ、三芳野神社の杉と的場村の池に同じような伝説が残されたのでしょうか。

2．伝説と景観の継承

初雁の杉がある三芳野神社は、平安時代の初めに創建されたと伝わる神社で、いつの頃か北野天神社も拝祀し、三芳野天神社と呼ばれるようになったといわれます。戦国時代には太田道灌に、また江戸時

代には川越藩主や将軍家から崇敬されていました。祭神はスサノウノ命・クシナダヒメノ命です。

ところが『風土記稿』では、的場村の初雁池の脇に三芳野塚という大きな塚があり、かつてその場所にあった三芳野天神社を移したのが川越城内の三芳野天神社なのだと説明されています。

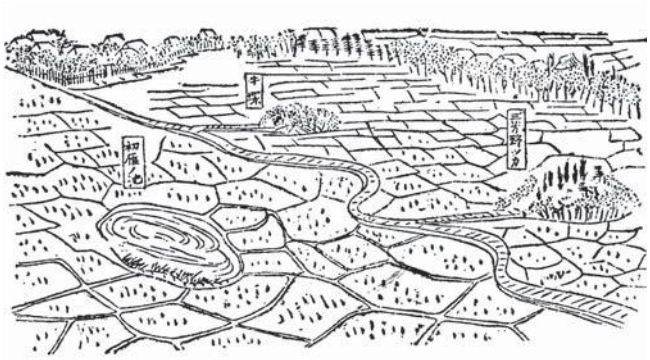


図１　江戸時代の「初雁池」とその周辺（『新編武蔵風土記稿』版本）

『風土記稿』にはその他にも、川越城は「古へ今の高麗郡上戸村にありし」とか、川越城の天神門や二丸門、三丸門は「昔この城高麗郡上戸にありし時の城門なり」と記されています。

このように『風土記稿』は、川越城と上戸村・的場村の両記述に同じような「初雁」の伝説を掲載し、さらに「川越城」と「三芳野天神社」の故地は入間川の対岸の上戸村、的場村なのだと記しているのです。これら記述の内容の真偽はわかりませんが、少なくとも『風土記稿』が記された江戸後期に、川越城の故地は入間川の左岸の上戸村や的場村あたりであったとする共通した認識が当時の人々の間に存在したことは確かなようです。

この認識の根拠は何だったのでしょうか。

その疑問を解くカギは、両地域の歴史に隠されています。

近年の調査研究の進展により、上戸・的場地域の古代の景観と川越城とその周辺地域の近世の景観がとても似通っていることが分かってきました。

まず、上戸・的場地域から見てみましょう（図２）。

この地域には、飛鳥時代から平安時代にかけて、古代入間郡の役所「入間郡家（いるまぐうけ）」が置かれていたことが最近明らかになってきました。その場所とは霞ヶ関駅の東の上戸新町内で、かつて初雁池があった場所のちょうど真北にあたります。

また郡家（成立時は評家（ひょうけ））の設置と軌を一にして「東山道武蔵路（とうさんどうむさしみち）」が造られました。

「東山道武蔵路」とは、律令国家が地方の行政区分として設けた「七道」の一つ「東山道」の枝道です。ちなみに七道は、行政区分であるとともに、国府を結ぶ幹線道路も意味しました。東山道は、近江－美濃－信濃を通り、上野国府（こうずけこくふ）（群馬県前橋市総社町）を過ぎてから新田（現太田市）あたりで枝分かれし、東山道武蔵路となって武蔵国府へ通じていました。平成元年、所沢市南陵中学校で側溝を持つ幅12mの直線道路が発掘され、東山道武蔵路であることが明らかにされてから急速に研究が進みました。その道路の北延長上の川越市内では、平成５年八幡前若宮遺跡で「駅長」と墨書された土器が出土し、東山道武蔵路の駅家（うまや）跡（駅路を利用する使者の休息・宿泊、乗り替え用の馬を配備した施設）の一部と評価され、的場を東山道武蔵路が通っていたことが明らかになりました(2)。

図２の中央付近の入間郡家を基点にしてみると、その東を入間川が流れ、南に初雁池があり、西に東山道武蔵路がほぼ南北に通っていたという位置関係にあることがお分かり頂けると思います。

東に清流、南に大池、西に大道で思い浮かぶのは、東西南北を青龍・白虎・朱雀・玄武の四神に守られる

図２　上戸・的場地域の古代（『迅速測図』明治14年に加筆）

四神相応の地です。上戸・的場の地には玄武が住むという適当な山が北にありませんが、他の三つの方角の要素は十分に満たしています。

では川越城とその周辺はどうでしょうか。図３は明治14年の迅速測図ですが、江戸時代の川越城とそれを取り巻く周囲の景観をよく伝えています。

本丸の曲輪を城の中心とすると、その東西南北には何があるのでしょうか。『風土記稿』の「ゆな川」の説明には「城の南の方を流るゝ小溝なり、此川の東北の方はすべて萱葭生ぜし沼なり」(3)とあり、城の南に沼があったことが記されています。またそれは迅速測図でも確認することができます。西には江戸と川越を結ぶ川越街道がやはり南北に走り、東には荒川（古くは入間川）が流れています。まさに上戸・的場と同じように北の山を欠きますが四神相応の地ということができそうです。

図３　川越城と周辺の景観（『迅速測図』明治14年に加筆）

３．戌亥の神を通して

上戸・的場と川越城及びその周辺の地域が似ているのは、初雁の伝説や三芳野の名称、四神相応の地という点だけではありません。奈良時代の宝亀３年12月19日の太政官符には、とても興味深い記述があります。

この太政官符は武蔵国入間郡の正倉（租税の稲穀を納めた倉）が焼けた火災に関するもので、一般的に「入間郡正倉神火事件」と呼ばれます。その事件とは、770年頃、入間郡の正倉四棟が火災にあい、糒（乾飯）穀一万五一三石を焼失して死者が出た。その原因を占ってみたところ、郡家の西北隅に祀られていた郡家の神・出雲伊波比神がしばらく幣帛の奉幣がないことに怒り雷神を引き連れて正倉を焼いたというのでした。当時、坂東を中心にこのような神火と称する正倉火災が多発していたのですが、その正体は、郡司が貢納物の横領などの不正を隠すために行った放火、あるいは敵対する地元豪族が現任郡司を追い落とすために行った放火と考えられています。内容はさておき、この史料で注目されるのは入間郡家の西北隅に出雲系の神が祀られていたという点です。

入間郡家の政庁が上戸新町の図２の位置にあったとすれば、その西北に現在あるのは日枝神社です。日枝神社は平安時代の末期に河越氏が当地に進出し、その所領を後白河上皇が久安６年（1150）に創建した京都の新日枝社に寄進したことで勧請された神社です。『風土記稿』には江戸後期の日枝神社とその周囲の様子を伝える挿絵が掲載されていますが、そこには日枝神社から真っ直ぐ延びた立派な参道が描かれています（図４）。その真っ直ぐ延びた参道の先にあるのが６世紀末頃に築造とされる牛塚古墳です。牛塚古墳は入間郡を代表する前方後円墳で、金銅製指輪等の出土品から被葬者は渡来系の豪族と推定されています。牛塚古墳の「牛」の意味については、これまで牛を葬った場所だったからとか、古墳の形が牛が寝そべった姿に似ているからとか言われてきました。しかし古代、貴人は「大人（うし）」と尊称されたので、その塚が「大人（うし）塚」と呼ばれ、いつしか「牛」の字があてられ「牛塚」となったとも推定できます(4)。

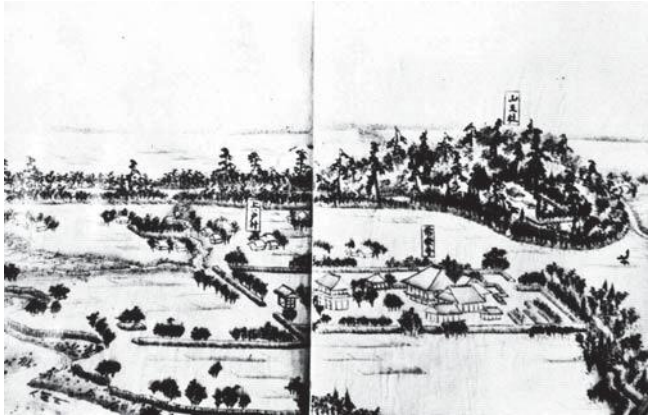


図４　江戸時代の日枝神社（山王社）の参道
（『新編武蔵風土記稿』国立公文書館蔵）

図２をご覧いただいてもお分かり頂けるように、日枝神社の場所は、貴人の墓として意識され続けた古墳時代の牛塚から真っ直ぐ北に伸びる道の線上に位置し、奈良時代に入間郡家の西北隅神・出雲伊波比神が祀られた場所にあたるといえそうです。平安時代の末になり、古代的権威のシンボルが祀られたその場所に、河越氏は自らが崇拝する中世的権威のシンボルの新日枝社を勧請することで、新しいリーダーであることを顕示して見せたとも理解できそうです(5)。

さて、今度は川越城の方へ目を向けてみましょう。

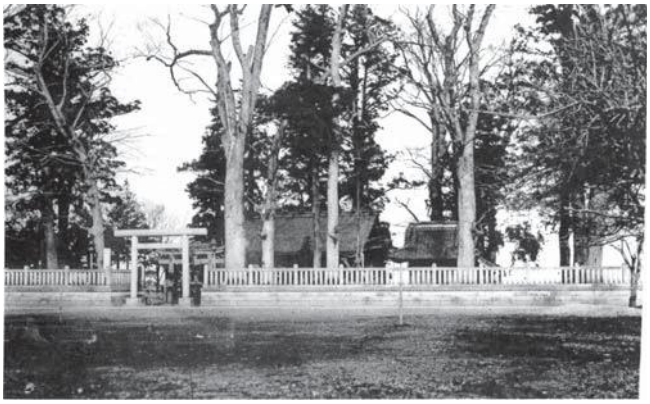
図３の迅速測図をご覧いただくと、城の中心の本丸から見て西北の方角にあるのが氷川神社です。氷川神社は、武蔵国一宮氷川神社（さいたま市）を分祠し里宮として奉斎したのが起こりといわれます。『風土記稿』にはスサノウノ命・クシナダヒメノ命・アシナヅチノ命・オオナムチノ命の出雲系の神々が祀られるとあります。

天文６年（1537）の河越合戦のことを記した『河越記』には「こゝに日川の明神とて戌亥にあたれる社あり」と記されていることから、戦国時代には城の戌亥（西北）に鎮座する神として祀られていたことがわかります。また『三芳野名勝図会』で、当社を古代の出雲伊波比神社とする伝承があると紹介している点も注目されます。

このように、古代の入間郡家の西北には出雲伊波比神社が、近世の川越城の西北には同じく出雲系の氷川神社が祀られていたことになります。

４．歴史や文化を受け継ぐということ

三芳野神社の初雁の杉にまつわる伝説とよく似た伝説を入間川の対岸の霞ヶ関に見つけたことを手掛かりに、入間川を挟む二つの地域の歴史と文化の、その継承のあり方の一端をみてまいりました。



氷川神社の古写真（明治時代末頃）

川越を含めその周辺地域にとって、古代の霞ヶ関に東山道武蔵路が通り入間郡家が置かれたことは、その後の歴史の方向性を決める一つの出発点になったと思われます。そのあと河越氏がこの地に進出し古代的な権威を引き継ぎ武蔵武士として活躍していきます。戦国時代になると、地域の中心は入間川の右岸、川越城を中心とした地域に移りますが、その時、入間川左岸から「河越（川越）」の名を受け継ぐとともに、景観から伝説まで様々な文化装置を受け継いだようです。

このような歴史文化の伝承のあり方を通じて、いつの間にか関係が忘れ去られた地域と地域の間の繋がりに気付いてみると、あらためて「歴史や文化を受け継ぐということ」の持つ重みを感じないわけにはいきません。

（田中　信）

【註】

(1)初雁池には、池の傍らで行われた武士の果し合いにまつわる「片葉の葦」の伝説（『霞ヶ関の史誌』1990）があるが、川越城の伝説にも城の姫君にまつわる「片葉の葦」の伝説（『川越市史』民俗編1968）があり興味深い。

(2)さらに東山道武蔵路の北方向のルートは、近年、川越市宮廻遺跡、坂戸市馬場遺跡、同市町東遺跡、吉見町西吉見条里遺跡で検出されている（『埋文さいたま』54号2012）。

(3)この記述の後に「水底に水の涌出する穴七つあり、是を七つかまと呼ぶ、此沼至て深く、ことに彼七かまなどあり」と続く。三谷榮一氏の研究（『日本文學の民俗學的研究』1960）によると戌亥の神信仰には「七つ甕」という独特の話がよく登場するが、それとの関連性が注目される。

(4)群馬県内の東山道にまつわる伝説には「牛がつかれて死んだ」というタイプのほかに「偉い人が通った」とするタイプの伝説があることが指摘されている。古代官道沿いの「牛」と表記される伝説は、本来「大人＝貴人」から起こった可能性が高いといえる（坂井隆『研究紀要』６号群馬県埋文事業団1989）。

(5)近江国日吉大社の西本宮の祭神は出雲系のオオナムチノ命で共通性が見出せる。

「田面沢駅」について

このたび、博物館では東上線開業100周年にちなみ、市交通政策課と共催で「東上線開業100年」という展覧会を開催した。館内ギャラリーに写真と資料を展示した小規模な展覧会であったが、開催にあたっては、市民の方や収集家の方、東武鉄道株式会社及び一般財団法人東武博物館等から写真や資料等をご提供いただいた。

東上鉄道（開業当時の東上線）は大正３年（1914）、池袋－田面沢間で開業し、以後、東武鉄道と合併して寄居までの区間が開通した。注目すべきは開業当初の終点となった「田面沢」駅である。資料が残っていないため、鉄道ファンの間でも「謎」や「幻」という語を伴って議論されているが、本稿ではこれまでに知られている情報を整理し、若干の資料を補足しながら、私論を記すものとする。

「田面沢駅」について

田面沢駅に関する基本的な情報として、以下の５件を挙げておく。

①大正５年国土地理院発行（大正４年測量）の1/50000地形図に記されている。

②田面沢村内にあった。

③川越町駅から1哩（マイル）36鎖（チェーン）（1.4哩）(1)の位置にあった。

④軽便（けいべん）鉄道法(2)に基づき申請され、敷設された。

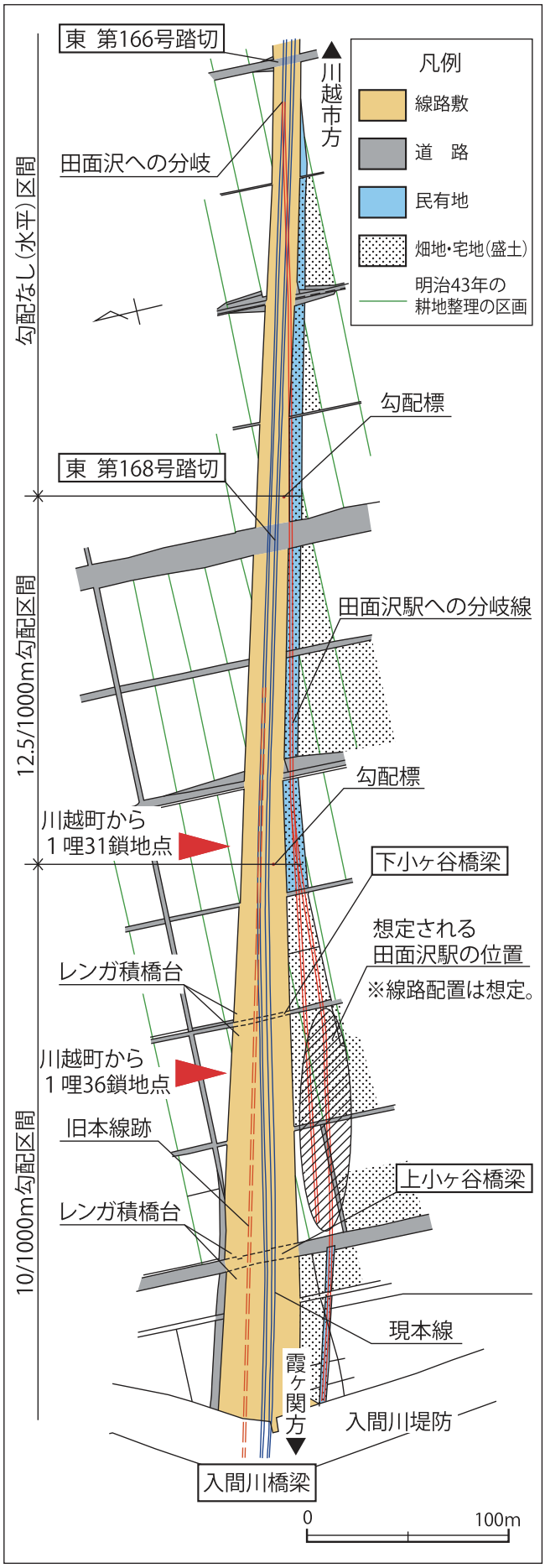
⑤大正５年、川越町－坂戸町間の路線延伸の際に廃止された。

これらは国土地理院の地図や国の機関紙である官報の記載であり、その内容は疑うべくもない。また、当初入間川には単線の鉄橋が架けられたが、昭和40年（1965）の川越市－坂戸町間複線化に際して、新たに複線の鉄橋が架けられている。複線化にあたり、川越市－霞ケ関間は「開業当初の本線（本稿では「旧本線」とする）」を上り線とし、南側（寄居方面に向かって左側）に下り線を増線しており、「旧本線」を入間川橋梁の前後で南側の新設した複線部分に移し、単線の鉄橋とともに廃止している。現在でも「旧本線」の廃止された部分にはレンガ積の橋台等が残っており、そのルートは高い精度でたどることができる。

しかし、これらの情報だけでは、現在の小ケ谷地内の漠然とした位置しか推測できない。これが「田面沢駅」が「謎」とされる由縁である。

資料から見た田面沢駅

大正10年（1921）、鉄道省刊行の『日本鉄道史　下篇』には、大正３年４月18日に川越町―田面沢間「１哩31鎖」



資料１　田面沢駅跡周辺図

で軽便鉄道敷設免許を下付した旨が記されているが、同年5月1日の営業開始時には「1哩36鎖」と記されており、文中には「大正4年度に訂正した」とあることから、当初予定されていた田面沢駅よりも5鎖（約100m）入間川に近い場所に駅が設けられたと理解できる。現地を見ると、「東 第168号踏切」の東側に勾配標（線路の勾配を示す標識）があり、12.5/1000mの上り勾配（こうばい）が始まっていることがわかる。「旧本線」は入間川に向かって直進しているが、「現本線」とほぼ同様の10/1000m程の上り勾配であったと思われ、川越町駅から1哩31鎖の位置は概ねこの勾配の途中にあたる。勾配区間の駅の設置は勾配をもったホームが必要で、勾配途中で列車の長時間停車が困難なことから、不適当である。そこで、勾配のない区間から平坦な分岐線を設け、当初の予定地の約100m西側に田面沢駅が設置されたことが想像できる。

大正3年（1911）5月3日付、内閣府鉄道局で「田面沢停車場設計変更の件」という文書が作成されている。大正4年上期の『東上鉄道株式会社第7回報告書』には「田面沢停車場構内に於いて側線を増設セリ」の記述があり(3)、これらの記録から開業後に田面沢駅に側線が設けられたことがわかる。このことと田面沢駅の位置が変更されたことを直ちに結びつけることはできないが、駅のあり方を考えるうえでは興味深い記事とすることができる。

さて、大正5年（1916）2月17日、東上鉄道は川越町－田面沢間の旅客運輸営業の廃止を申請し、同26日に許可を得た。しかし、同年刊行の『東上鉄道株式会社第九回報告書』では、その後も「田面沢－名細（なぐわし）間線路変更」や「田面沢－高坂間線路及工事方法変更」申請の記事がある。厳密には田面沢駅は軽便鉄道法に基づく路線の駅であり、私設鉄道法に基づく「東上本線」の駅ではないが、報告書の記述では「田面沢駅」が起点となっている。前掲の「日本鉄道史　下篇」には「（大正）五年十月二十七日川越町坂戸町間五哩五十三鎖開通シ同時ニ軽便鉄道川越町田面沢間ノ一部ヲ廃シタリ、」とあり、これらのことから、田面沢駅が「旧本線」若しくは「旧本線」からの分岐付近に駅が設置された状態であったと想像できる。

旅客運輸営業を廃止後、田面沢駅では貨物輸送のみを行っていたと考えられ、大正5年10月26日の認可を受けて営業の廃止となる。同日、坂戸町までの営業開始が許可されて池袋－坂戸町間が開通したが、同年11月1日に「田面沢仮線」の敷設を申請し、同10日に認可を受け、翌年1月11日には使用延期の認可も得ている。この「仮線」は鉄道局の資料では「分岐仮線」と表現されており、「旧本線」から分岐した支線が再び設けられていたことになる。

土地の区画から見た田面沢駅

ここまで、「田面沢駅は旧本線から分岐した側線に設けられた駅」としてきた。次に側線がどう展開していたかを考えてみたい。

まず、側線の位置は第168号踏切東側から南側（坂戸町方面に向かって左側）に分岐したと考える。この地域は明治43年（1910）に耕地整理が行われ、その時に整理された整然とした水田の区画が現在でも残っており、現在の東上線の敷地以外に側線が敷かれていれば、その痕跡は明瞭に判別できる。資料1のとおり、北側に関してはその痕跡はない。ところが、南側には線路敷に添うように分筆された民有地が確認できる。図中の第166号踏切西側にはじまり、少しずつ幅を広げながら第168号踏切西側まで続いている。これらは田面沢駅への分岐線の敷地として東上鉄道が取得し、複線化の際に不要になり、民有地として譲渡されたものと考える。その西側については明瞭に線路敷と考えられる民有地は確認できなかったが、川越町駅から1哩36鎖地点を計測すると、図のようになるため、堤防近くに残る東西に長い土地を線路敷と想定して、側線の位置を推定している。

さて、東上鉄道の発起人の一人に内田三左衛門の名がある。三左衛門は豊島郡志村で醤油醸造業を営んでいたが、川越の出身とされている。もとより、田面沢駅のあった小ケ谷地区は内田姓が多く、幕末には内田善蔵という豪農がおり、その長男は江戸へ出て、伊藤八兵衛として「江戸一の富限者」と名を馳せたという土地柄である。同姓ということだけで、三左衛門の生地を小ケ谷とすることは乱暴かもしれないが、発起人である三左衛門の出生の地「田面沢」に鉄道を開業したということであれば、まさに「故郷に錦を飾った」ことになりはしないだろうか。いささか感傷的な仮説であるが、駅を設けた理由として挙げておく。

ここが田面沢駅？

本稿では田面沢駅の位置について考えてきたが、駅は「旧本線」から南に振れた位置にあったと推測した。これは築堤（ちくてい）の高さが高くなるにつれて法裾（のりすそ）が広がるので、「旧本線」直近には線路が敷けないと考えたためである。

しかし、もう一つ大きな課題がある。資料2は大正

４年(1915)頃の川越町駅の写真である。画面奥側のホームに列車が入線するところで、ホームには到着を待つ乗客の姿が見える。駅舎が右側に見えるため、この列車は田面沢からの上り列車である。列車は蒸気機関車を先頭に客車や貨車を従えて走ってきたのだが、下り列車はどうだったのであろう。機関車を上り列車の先頭に立たせるためには、下り列車は最後尾から列車を押しながら後ろ向きに走らなければならない。このような状態を回避するためには、田面沢駅構内に機関車を付け替えるための側線が必要となる。これを設置することで、下り列車の先頭から側線を通って最後尾、上り列車の先頭に付けることができる。しかし、これでは機関車の向きが変えられないため、下り列車の先頭に立つ機関車は後ろ向きに走っていくことになる。そこで、機関車の向きを変える「転車台(てんしゃだい)」が必要になるが、川越と下板橋の機関庫には設置されていたものの、田面沢駅の記録はない。東上鉄道の蒸気機関車は10m前後のものが多いことが川越機関庫の写真から判断できるため、小型の「転車台」が設置された可能性もあろう。また、「転車台」がなくても、列車の前後に機関車を付け、下り列車は下り側の先頭、上り列車は上り側の先頭の機関車が引っ張るという方法も考えられる。当時の時刻表を見ると、途中駅の停車時間が１～２分程度であるのに対し、川越町駅では４～６分程度とやや長いため、機関車の連結と解放作業にかかる時間とすることができる。この課題の解決には線路配置等のより具体的な資料が必要であろう。

資料２　大正4年頃の川越町駅

本稿では、市内にあった「謎」の駅「田面沢駅」について情報を整理し、若干の考察を試みた。駅の位置についても言及してみたものの、あくまで推論の上に成立した仮説にすぎない。資料は希少とはいうものの、国等が保有している公文書には興味深いものが少なくない。これらの資料を具に確認することが新たな理解につながると思われる。今後の研究の進展に期待したい。

（教育普及担当　天ケ嶋　岳）

【註】

(1)当時の鉄道は米英の技術で敷設されたため、「哩」と「鎖」で表記された。１哩＝約1,609m、１鎖＝約20m。

(2)明治33年(1900)の私設鉄道法の制定で民間資本の鉄道がつくられるが、同43年(1910)に手続が簡便な軽便鉄道法が制定され、川越－田面沢間は同法で申請された。

(3)東武博物館山田貴子氏のご教示による。本稿作成にあたっては、同氏をはじめ、多くの方からご助言をいただいた。改めて謝意を表したい。

Information

平成26年度の博物館行事です。(3月まで)

展覧会・講　座・教　室 etc.

●…一般向け事業　開催日　講座名
○…子ども向け事業　内容　申込開始日

1月

17日(土)～　第25回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

○10(土) 子ども体験教室 **まゆ玉飾りを作ろう** 12/3

○24(土) 子ども体験教室 **たこを作ろう** 1/7

●31(土) **土偶作り教室** 1/8

2月

第25回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

○14(土) 子ども体験教室 **昔の道具を使ってみよう** 申込不要

○21(土) 子ども体験教室 **昔の道具を使ってみよう** 申込不要

●1･8･15(日) 博物館歴史講座 **川越の古墳時代** 1/9

3月

～1日(日) 第25回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

28日(土)～第41回企画展「古代入間郡の役所と道」(仮題)

○7(土) 子ども博物館教室 **昔の織物に挑戦** 2/3

○14(土) 子ども体験教室 **和紙作りに挑戦** 3/1

○21(土) 子ども体験教室 **わら細工に挑戦** 3/3

●1･8･15(日)　博物館歴史講座 **川越の民俗** 2/10

●22(日)　講演会 **古代入間郡の役所をさぐる**

※変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については「広報川越」またはホームページを御覧ください。お問い合わせは博物館まで。

第25回　むかしの勉強・むかしの遊び展

平成27年1月17日(土)～3月1日(日)

毎年恒例の「むかしの勉強・むかしの遊び展」の季節がやってきました。この展示は、当館の収蔵資料から地域の人々の暮らしの移り変わりをたどり、昭和30～40年代の教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を再現します。今回の展示では東京オリンピックがあった、昭和39年(1964)に製造された自動車や昭和40年代に家族で遊んだゲームなどを展示します。また、2／21(土)には博物館入口前に、なつかしい昭和の自動車が並びます。

この展示を通して、大人が子どもに当時の思い出を語れるような場となれば幸いです。

みなさまのご来館をお待ちしております。

東京オリンピックが開催された昭和39年に製造された
ダイハツ　ミゼット

利　用　の　御　案　内

◆入　館　料

区　分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一　般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間　午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休　館　日　月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ
(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

◆交　通　案　内

東武東上線・JR川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より、

●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分

●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

●ガイド　○博物館　平日(開館日)午前11時・午後2時　土・日・祝日　午前11時・午後1時・午後2時・午後3時
※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

○川越城本丸御殿(市民ボランティア)　毎月第3日曜日　午前11時・午後2時
※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

○川越市蔵造り資料館(市民ボランティア)　毎月第2日曜日　午前11時・午後2時
※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

●機織り実演・体験(協力:博物館同好会)

○博物館　毎週火・水曜日　午後1時～3時　華の会(裂き織り)
毎週木・土・日曜日　午前10時～午後3時(12時～1時はお休み) 川越唐桟手織りの会

※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

平成26年　12月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

平成27年　1月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

●印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿)
●印は、2館休館(博物館、本丸御殿)
●印は、1館休館(博物館)

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のＱＲコードから登録の手続きができます。随時最新の情報等を配信します。

※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。

発行日　平成26年12月16日　　発行　川越市立博物館

〒350-0053　川越市郭町2丁目30番地1　TEL 049-222-5399　FAX 049-222-5396
Eメール　hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp　　ホームページ　http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/